20July2024

2023 年 10 月-2025 年 1 月 NPO 国際地政学研究所
「ジオポリティーク（地政学）講座」開催ご案内

・NPO 国際地政学研究所「ジオポリティーク講座」は、2023 年 10 月 25 日（水）-令和 2025 年 1 月 8 日（水）の間、44 回（3 回／月基準―25 カ月間）にわたり古代からの戦争（軍事）史をたどり、人類の「地理学と政治学との関係」である「ジオポリティーク」を学習し、ご聴講の皆様と今日への示唆を探ろうとする講座です。

・実施の詳細は次の通りですが、「講座」は、教室確保が「抽選」によりますため、日程変更がございますこと前もってお断り申し上げます。ご確認はホームページ上でお願い致します。

・ご出欠：可能な限り開始時刻 3 時間前までにご連絡頂けると助かります。
宛先：メール：hayashi@igij.org　電話：090-2308-7579）

・講座は、各回個別に（1 回でも・・・という意味）ご聴講が可能です。

・受講料：会員・学生・10 回超聴講者 500 円／一般 1,000 円

・実施場所：「三田いきいきプラザ 2 階集会室」東京都港区芝 4-1-17（03-3452-9421）
JR 田町駅下車、三田口プロムナードデッキを森永ビルに沿って浜松町方向右へ、第 1 京浜道路ファミマ前三叉路渡り日比谷通りを右側歩道直進 50m 先右折、公衆トイレ前通過直ぐ正面 2 階建て建物（徒歩 7 分）
地下鉄三田 A-9 から出て左 20 秒
プラザ内 2 階集会室（A・B・C・講習室）使用は抽選で教室確保のため案内看板（林名で掲載）をご確認下さい。
なお、雨天時には、JR 田町駅あるいは地下鉄三田駅から A-9 出入口まで地下道を通り濡れずに移動可能です。

3 月末に閉鎖となりました

2023－2025 年講座

IGIJ ジオポリティーク講座基本シラバス

凡例：

（講座ナンバー・実施予定日―実施時間は原則 1730-2030―）全体を方向付けるキーワード又はフレーズ			
テーマ	地域	時期・時代	時代精神など
示唆あるいは解説の目標			

＊講義：NPO 国際地政学研究所　柳澤　協二　理事長／他講座講義は林吉永理事担当
＊予定表緑字は日時場所決定
＊紫字は終了

はじめに―日本の国のかたち―

講座①2023.10.25（水）「日本が目指すべき『国のかたちとその防衛・安全保障の在り方』」			
時代精神の形成	国際社会における日本	100 年の計	中庸国家の国際社会に果たす役割
ジオポリティークに日本の立ち位置を見出し国民が目標を共有できる示唆を得て、しかもここの国家それぞれが国際社会において穏やかな生存を可能とするコンセンサス形成を目指す知見を養います。また同時に、日本が国際社会においてどのようなアイデンティティーを有しているのか、また他国はどうなのかを再確認することで日本がどのような立ち位置にいるのかを考え、有るべき、目指すべき国のかたちを形成する礎を考えます。			

第 1 節　序論

講座②2023.11.1（水）「ジオポリティークとは何か―『地政学』に替えて」			
ジオポリティーク	新たな「地政学」の深化に向けて	世界	古代から今日
「地政学」という言葉には、「怪しげで悩ましい」響きがあります。それは、「生存競争と弱肉強食」を『種の起源』で謳ったダーウィンや、ローマ教皇の権威に代わる戦争の正当性を『戦争論』で示したクラウゼヴィッツらの主張に見られるように、「地政学」が「覇権獲得の論理」として流行し「戦争の世紀」を演出し、日本においては「大東亜戦争」を促した時代精神だったからではないでしょうか。ここでは言葉を「ジオポリティーク」と改め、狭小な地政学概念が生んだしがらみの解放と普遍的イメージの共有を図ります。 序説においては、本稿が目指す「ジオポリティーク」の概念形成のために、歴史、地理・地勢、あるいは地図からイメージを形成する「脳」作業を活性化します。その作業が、ジオポリティークの追究を試みる動機付け（エンカレッジ）になれば幸いです。			

第 2 節　古代史に観るジオポリティーク

第 1 章　地中海・西アジア・東アジアに萌芽した古代国家

講座③2023.11.８（水）「ペルシア戦争―ヘロドトス『ヒストリア』・・・マケドニアの策謀」			
ペルシア戦争	エーゲ海	BC5 世紀	民族の移動・都市国家・帝國
ヘロドトスのペルシア戦争史『ヒストリア』から地理と政治・外交・軍事の関係を読み取り「ジオポリティーク」の原点を見出すイメージを探します。同盟、連合といった国際関係、交易の封鎖によって脅威国の弱体化を導き抑止を図るなど、それらが後の地理学上の諸要素と覇権戦略との関係論として創生される「地政学」への示唆を学びます。			

講座④2023.11.22（水）「ペロポネソス戦争」―トゥキュディデス『ヘレニカ』

ペロポネソス戦争	エーゲ海	BC5 世紀	民族の移動・都市国家・帝國
ペルシア戦争に続いた戦争を、トゥキュディデスのペロポネソス戦争史『ヘレニカ』から、地理と政治・外交・軍事の関係を読み取り、ここでも「ジオポリティーク」の原点を見出すイメージを探します。同盟、連合といった国際関係、交易の封鎖は、後の地理学上の諸要素と覇権戦略との関係論として創生される「地政学」への示唆となり、冷戦時代には、更に進化をたどります。			

講座⑤2023.11.29（水）「中国の戦国時代―司馬遷『史記』／中国戦乱のジオポリティーク―」			
中国の戦国時代	中国大陸	BC5 世紀-BC221	中原の覇権争奪
中国の歴史を綴った『二十四史書』を辿って中国が「中華民族の原点」とする漢の時代に発生した「中国の DNA」の発見を試みます。中でも、司馬遷の『史記』は「中国王朝統一」のプロセスを明らかにしてくれます。それが春秋戦国時代の中国であり、戦国の収束＝「統一」は、今日、中国で謳われている「中華民族の偉大な復興」“Chinese Dream”の原点でもあります。			

講座⑥2023.12.6（水）「アレクサンドロスⅢ東征―アッリアノス『東征記』／アレクサンドリア			
アレクサンドロスⅢのアジア遠征	アテネ・中東・インド	BC4	覇権・植民地・帝国
『王道論』、『殖民論』を著わしたアレクサンドロスⅢの家庭教師アリストテレスは、大王の東征に際して、「ペルシア湾からユーフラテスの地理調査」を教示します。『プルターク英雄伝』などとかく戦術、戦闘面での英雄性が喧伝されますが、ジオポリティークなアプローチは、地理学と征服・支配・統治との関係を教唆し、加えてこのテーマでは、その時点で存在する「移動・通信」手段が作る「地球規模」の現象（グローバリゼーション）を学習します。			

第 2 章　古代帝国

講座⑦2023.12.13（水）「秦の中国統一／国家の DNA」―司馬遷『史記』			
中原の覇者	中国大陸	BC221	覇権
「兵馬俑」を訪れると秦の始皇帝が行った「中国統一」の偉業が偲ばれます。国家は、まさに覇者の意思の下に産まれた「被統治集団・地域」であって、エーゲ海文明を嚆矢とする都市国家集団でもなければ、所与の国家である「日本の国家誕生」とも異なります。全てが覇者である皇帝の意思とその作為によって形態が整えられ、引き継がれるようになって行きます。それは「トゥキュディデスの罠」によって生ずる現象ではありますが、「白人種の歴史に見る覇権」と異質であることを学びます。			

講座⑧2024.1.10（水）「カエサルの『ガリア戦記』―ローマ化／ローマ帝国へ」			
カエサル（BC100-44）のガリア遠征	西欧（ラインまで）	BC168	覇権・植民地・帝国
『ガリア戦記』には、筆者であるカエサル自身がドイツのライン川、ブリタンニア（イギリス）までの地域を平定していく過程が記されています。通常、「戦記」は戦闘の記録ですが『ガリア戦記』では戦わずして勝つ計略のケースが多くあります。そのベースは、後に地政学の下地となる「地理学」論と共通する「地勢・民族・言語・宗教・天象・気象、そして文明」といった地誌であって、そのことどもに思いをいたしてはじめてジオポリティークへのアプローチとなります。この学習目標「ジオポリティーク」―古代―は、アレキサンダー大王の東征にも通じます。カエサルのガリア遠征は今日のヨーロッパの始まりとも言えます。その原点をジオポリティークに辿ります。			

第 3 章　超国家誕生

講座⑨2024.1.24（水）「キリスト教誕生・宣教・公認―地球規模のボーダレス世界―」			
キリスト教誕生・公認・十字軍	中東・ローマ	創世紀-中世期	宗教・聖戦

2015 年 11 月 13 日（日本時間 14 日）、フランス・パリ市街とパリ郊外サン＝ドニ市において、ISIL “Islamic State in Iraq and Levant”の戦闘員と見られる複数のジハーディスト（ジハード＝聖戦）のグループによる銃撃および爆発のテロが同時に発生、死者 130 名、負傷者 300 名以上の犠牲を数えました。このサン＝ドニ市に在る司教座聖堂はフランス・ルイ王朝の「菩提寺」であり、第７回・第８回の十字軍指揮官、ルイ９世「聖王ルイ（サンルイ、或いはセント・ルドヴィコ）」が眠っています。

また、サン＝ドニ市は、イスラム移民がフランス国内でも多数生活している地域です。そのサン＝ドニがイスラム・テロの舞台になりました。

今日、地球上隈なくキリスト教会が所在し、その信者数は約 23 億人と言われます。キリスト教の影響力は、中世において「王権神授」をもって国王を支配し、戦争の正当性をローマ教皇が与えるという盛力を誇っていました。ローマ帝国は、ミラノの勅令（313）でキリスト教を受容しますが、それは、キリスト教にとって、過酷な迫害・殉教を乗り越えたローマ帝国への宣教の勝利でした。中東の片隅に萌芽したキリスト教が「ジオポリティーク」という文脈において、地球上、絶大な影響力を持つに到るプロセスを確認する作業は、まさに国家を超えて信者の意志に求心力を働かせる「超国家」の性格を知る上において必須です。

講座⑩2024.1.31（水）「イスラム教誕生／イスラム国家建国―アラブの民の価値観共有の原点―」			
イスラム教の誕生（ムハンマド）	地中海沿岸・西アジア	610 以降	宗教・聖戦

イスラム教の大きな特徴であり、キリスト教と根底において異なるのは、イスラム教自体が国家を建設したことです。国教としては勿論のこと、国家体制を支える法体系が教義に所以しています。従って、イスラム教が建国した国家では、国民の価値観のベースがイスラム教に在って、国民のほとんどが信徒ですから、国政、国軍、国民をイスラム教で律せられるのが当然の現象です。

イスラム教徒の数は、キリスト教に次ぐ 18 億人を超えるとされる世界第 2 位の信徒を擁し、「グローバリゼーション」と「ボーダレス」という「超国家」性がイスラム教においても著しく認められます。宗教自体が国家を形成するということは、政教分離と真反対のガバナンスであって、それ故に相容れない宗教や国体との衝突も際立っています。別けても、イスラム教対キリスト教という構図でレコンキスタや十字軍などを経、今日でも相互に対峙して「聖戦」を繰り返しています。本文脈から、宗教がジオポリティークを読み解く大きなファクターであることを学習します。

第 4 章　日本の場合

講座⑪2024.2.7（水）「世界の先駆け『古代国民国家・専守防衛型国防体制』―国のかたち―」			
「白村江の戦敗戦」と中大兄皇子の国家改革	中国・日本・朝鮮	6-8 世紀	古代国民国家

日本の歴史に国家的「ジオポリティーク」の感性が窺えるのは「白村江の戦敗戦後」の、諸防衛施策―戸籍（徴兵の指定）、北九州司令部（大宰府）設置、戦略的防衛線の構築（離島警備・防人の配置・水城／狼煙台／城砦）・都府の移転（大津遷都）―ですが、それは、「白村江の戦」において新羅と連合した唐軍が戦後も朝鮮半島に駐留して「日本に対する脅威」となっていたからです。それらは『日本書紀』・『舊唐書』・『三国史記』に記されており、北九州離島から朝廷所在府に至る防衛線に沿った国防施設の遺跡が点在することからも、そこに、大国の脅威に対する専守防衛体制を学ぶことができます。

第 5 章　古代帝国&超国家のジオポリティーク

講座⑫2024.2.21（水）「ローマ帝国の盛衰―勃興・分裂・衰退・滅亡―」			
ローマ化現象がもたらした帝国	ヨーロッパ	BC1 世紀-1453	文明の融合と伝播

ローマ帝国の成立は、確かに軍事力による外部ライバル、および、帝国内のライバル打倒の結果でした。しかし、ローマの場合、同等の帝国が存在して雌雄を決したのではなく、広域にわたり、

それは今日のライン川以南のヨーロッパ、バルカン、小アジアに至る地域に多数存在する都市国家の多くを「ローマのスーパーパワー」で吸収することに成功したからでした。それは、今日社会の企業間で行われる「M&A “Merges & Acquisitions”＝合併（併合）・買収（吸収）」に似た作用です。「大が小を制する」に、第 2 次世界大戦後の東西冷戦構造における東側世界の「イデオロギーと軍事力」による「抑圧」的統治ではなく、「大国が小国の面倒を見る形態」即ち、「パトロン」が「クライアント」を庇護する制度である「ローマ化」をもって「パクス・ロマーナ」の形成に成功しました。

そのローマ帝国の体制は、東西分裂があったものの、15 世紀まで 1000 年以上もの長期にわたり維持しました。このローマ帝国の盛衰を追って、中世のジオポリティークを観察します。

講座⑬2024.2.28（水）「古代中国王朝のジオポリティーク―DNA の継承―」			
王朝交代現象―王家のミーム論的衰退―	中国大陸	BC221-AD1912	中華思想・華夷秩序

今日の共産党主導の中国統治レジームは、「王朝国家時代」の DNA と異質なのでしょうか。「漢民族」国家を謳う現中国に、「元（1271-1368）」の侵略、「農耕（漢）民族　騎馬民族　農耕民族」交代が生じたにせよ、「他民族の大移動」という現象によってヨーロッパで起こった「国家の変異」ほど顕著ではありません。

民族は制約や抑圧を克服する可能環境論が、動かし難い環境に生存が支配される決定環境論を超克する歴史を重ねてきました。この文脈上、「広大な中国」の域を超えて他を武力制圧することが無かった中国ですが、社会・共産主義プラス国家資本主義社会を形成したそのジオポリティークが、今や、世界最強を目指す軍事力を擁して、その域を超えようとしています。

今日に至る中国の歴史をジオポリティークに深掘りし、国際関係における秩序、および対中国の国家関係に示唆を見出す試みに挑戦します。

第 3 節　中世帝国の権勢――封建社会のジオポリティーク――

第 6 章　帝国秩序の混乱から収拾へ―王権の全盛／中央集権とジオポリティークの伸長―

講座⑭2024.3.6（水）　➡　3 月 8 日（金）「王位継承戦争が招いたジオポリティークの混乱」			
王位継承戦争	ヨーロッパ	13-16 世紀	ハプスブルグ家

中世ヨーロッパの戦争は「王位継承戦争」と言われます。その戦争は、王朝間の政略結婚がネットワーク化して、ヨーロッパにとどまらず「王朝間の対立」が植民地にまで及んでいます。それらは、キリスト教国の皇帝・領主らの勢力、権力争いであって、後の国民国家間の戦争に較べ戦争の様相は古典的です。王位継承戦争の学習と認識は、王朝間戦争の根元的構造を知ることにあるでしょう。その意味で、王朝の王位継承戦争に深く関与した「ローマ教皇」の権威、火種の中心にあった「ハプスブルグ家」のヨーロッパにおける「繁殖」を材料にして「王位継承戦争発生の必然」をイメージします。

第 7 章　ユーラシアのピヴォット

講座⑮2023.3.13（水）「ユーラシア・ピヴォットの鳴動―モンゴル征西と脅威の拡散―」			
タタールの軛	ユーラシア大陸	13 世紀	ユーラシア・ピヴォット

ヨーロッパ地方、別けても、スラブ民族の生存圏にモンゴルが攻め入って支配した歴史は、後のロシア帝国、ソヴィエト連邦、今日のロシア連邦形成に影響を与えています。

歴史的に、仮にそれが「疾風迅雷」、「一過性」のピヴォットであっても、ユーラシア大陸で

は、地続きに連鎖現象を惹起して国家を「RMA[1]」に巻き込みました。 「民族の移動」と言われているこの現象は、ユーラシア大陸の動向に歴史上実に大規模な社会変動をもたらしています。ケルト民族、フン族、ゲルマン民族、といった民族独自の移動、そして、アレクサンドロスⅢの東征、カエサルのガリア遠征、レコンキスタを起こしたイスラムの侵攻、十字軍、大航海時代など、大規模軍事力の移動などが巻き起こした、「国際社会の旧秩序の破壊」や「地理学的環境を変動させる現象」がその歴史的ルーツと言えます。 H.マッキンダーはこの現象の発起点をピヴォットと名付けました。ここではその代表的現象としてモンゴルの征西を採り上げます。

第４節　ジオポリティークの飛躍―世界の地球規模拡大―

第８章　中世から近世へのジオポリティーク現象

講座⑯2024.3.27（水）「航路開拓・新大陸発見」			
大航海時代	大西洋・太平洋	15-16 世紀	略奪・支配・布教・白人・RMA
白人種国家は、高額なイスラム交易商品を買うことから、直接に安く仕入れる新大陸への航海が可能になると、「覇権」を争う場を外洋にも拡大していきました。王国では、封建領主の中央集権化が進み、冒険家を雇い入れ、パトロンとなって、競って未開の地、民族を侵略・略奪する行為を督励していきます。航路が新たに開拓され、造船技術や航海術が発達し、外洋への長期間、超長距離遠洋航海のため、外地における補給や休養に必要な根拠地を確保していきます。その運営のため、生物（動植物）調査、資源開拓（鉱山採掘）、天象気象観測、調達補給、会計業務、港湾整備、土木建築の技術が専門化し、英国におけるオックスフォードやケンブリッジなど、現在の大学の先駆けとなる専門学校が開設されていくのもこの頃です。 当然、競合する国や組織間の争いがエスカレートすると、海洋、又外地における国家間の武力衝突が発生し、「海賊」の略奪行為から、略奪を組織的に行う、或いは、略奪からの防衛のため、船団護衛の「海軍」が生まれ、進化する兆しを示すのもこの時代です。			

第９章　ヨーロッパ大陸の大戦―主権国家成立への道程―

講座⑰2024.4.3（水）「宗教改革から 30 年戦争へ―主権国家誕生の引き金―」			
キリスト教の分裂・対立・戦争	ヨーロッパ全域	1517 年以降	WASP
プラハ窓外放出事件[2]は、1419 年と 1618 年に起こったボヘミア王国（現チェコ）の神聖ローマ帝国や体制に対する反抗の一つとして市民活動が芽生えてきます。ここで紹介するのは、キリスト教徒封建領主などが結託した腐敗であって、「不満」と「批判」が実力行使の革新、浄化につながっていきます。 前者はフス[3]戦争の契機、後者は 30 年戦争の契機、チェコにおける民族運動とも評価され宗教戦			

[1] RMA：Revolution in Military Affairs 軍事（戦争）が社会を変革し、戦間期の社会変革が戦争を変革する相互作用、軍事に依るレジーム革命、転覆ではなく、軍事イッシューが素で起きる社会的変革、戦争の変革現象

[2] 宗教改革の先駆者プラハ大学教授ヤン・フスが、異端と宣告され火刑に処され、ボヘミア人たちのウトラクィスム（「パンと葡萄酒」の聖別両形色拝領―キリストの最後の晩餐で「パンと葡萄酒を聖別、拝領を継承するように言い遺した）を拒否したことに対して、「ウトラクィスム」を行うローマ・カトリック教会はボヘミアに対する聖務（ミサ聖餐など）を停止、ボヘミア王ヴァーツラフ 4 世は、ローマ教会との和解策を探り、プラハの教会をローマ教会へと復帰させ、当時、フス派の中心となっていた新市街参事会を解散し、ローマ教会信徒だけの参事会を組織、これに憤ったフス派勢力がプラハ市庁舎を襲撃し、旧教派（カトリック）市参事会員 7 名を窓から投げ落とし殺害、これがショックでヴァーツラフ 4 世は死去したとも、この事件を契機としてフス戦争が勃発（チェコ民族運動-1436 年）

[3] ヤン・フス（1369 頃-1415 年）：チェコ出身のキリスト教改革思想家、ジョン・ウィクリフ（オックスフォード大教授、聖職者、カトリックの教義はミサに於いてパンとワインがキリストの本物の肉と血に変じるという化

争の先駆けでした。

1517 年、M・ルターがローマ教会に抗議してヴィッテンベルク市の教会、ヴィッテンベルクの城内に「95 カ条の論題」を打ちつけたのが「宗教革命」の発端となります。宗教改革は、「免罪符販売」、「聖職者の堕落」などが蔓延するカトリックの浄化だけでなく、「新旧それぞれのキリスト教を信奉する国家」、その主導する「教会勢力」、領主である「有力貴族」対立の激化によってヨーロッパ全域を巻き込んだ 30 年戦争（1618-1648）へと発展します。

30 年戦争の終結は、「ウエストファリア体制」を構築し、ヨーロッパ全体に「主権国家誕生の種子」を蒔き、後の「国民国家の萌芽」を促しました。近代国民国家の誕生は、「フランスの市民革命・ナポレオン戦争・王政復古・諸国民の春」を経て、それぞれの国の「主権・国益・領域」の確保、拡張をめぐる「戦争の世紀」を招いていきます。

この時代、ジオポリティークには、「戦争論」、「地政学」が生まれ、「国民国家の戦争」を盛んにするきっかけを作ります。もう一方、宗教革命は、カトリックの浄化を促進しますが、他方で、キリスト教を信奉する白人諸国が「神の啓示 “Manifest Destiny”」を掲げ、「布教」と「後進地域」の植民地化、略奪、原住民の隔離あるいは奴隷化あるいは虐殺を繰り広げ略取・略奪を「国益」と化していきます。

これを、それらの諸国は、「神の啓示 “Manifest”」として掲げ、WASP “White Anglo-Saxon & Protestant” を自称して「30 年戦争以前の『戦争の正当性』同様」に「侵略」の正当性をキリスト教に求めることに連鎖します。”Manifest Destiney” の原点は、「宗教革命」にありました。ここでは、「戦争」の連鎖同様に「キリスト教・イスラム教」が国教化されて以降、戦争の連鎖を生んできたことを学びます。

第 10 章　ナポレオン戦争の功罪

講座⑱2024.4.10（水）「RMA ”Revolution in Military Affairs”の連鎖」			
市民社会と戦争との関係	戦争生起の場・市民生活の場	常態	スピン・オフ／オン

RMA は「社会における変革の現象と軍事における変革の現象、「戦争」の相互作用」であって、そこには、戦争の本質、軍事の役割、軍事技術の発達、軍事作戦上の戦略・戦術、そして国家の各種分野における戦略組成、それらの結果形成される「国のかたち」、「文明」に係る多岐多様な連鎖を誘導します。

ここでは、それらが、将来を洞察し、国際社会を導く重大要素であることを理解します。

講座⑲2024.4.24（水）「近代国家の戦争の黎明―ナポレオン戦争―」			
ナポレオン戦争	ヨーロッパ	1803-1815	国民国家

フランス革命以降、ナポレオンはフランスを率いて他国を脅かすヨーロッパ随一の大帝国を築き覇者を自負していきます。それは、フランス革命のキャンペーンが、封建領主の既得権益を脅（おびや）かし消滅させることに直結するナポレオンの侵攻であって、フランス革命の後を追うように国民国家が各地に萌芽して行くきっかけを作ります。

封建領主は、ウエストファリア体制後維持してきた「王政」とその「主権・領域防衛」のため、英国を核心に、普・露・墺・瑞・蘭など諸国が対仏大同盟を結成してナポレオンに挑戦しましたが、第 6 次まで大同盟は連戦連敗します。しかし、ロシア侵攻時のモスクワに於ける大敗が原因でコルシカへ追放されたナポレオンでしたが、再起を図り、対仏大同盟と 7 度目の決戦に至り敗戦（1815－100 日天下）しました。これが「ワーテルローの戦い」です。

しかし、ナポレオン（戦争）には、徴兵を利して抜きん出て強力な近代国軍のモデルを造り上げたという遺産がありました。ナポレオンの戦いぶりを「戦争の本質・戦略・戦術」という文脈でま

体説は誤り等、カトリックを真っ向から批判）の影響を受け、宗教改革に着手、ボヘミア王の支持のもとでローマ教会、贖宥状を批判、聖書を信仰の根拠とするプロテスタントの先駆者。カトリック教会はフスを 1411 年に破門、1415 年、コンスタンツ公会議で有罪判決、世俗の勢力によって火刑

とめたものがクラウゼヴィッツの『戦争論』です。それは、「戦争は他の手段をもってする政治の継続である」とした、戦争の世紀における時代精神「地政学」の萌芽でもありました。
　また、ナポレオン戦争は、ナポレオンの敗戦によって王政復古に至ります。ヨーロッパにおける世界大戦の様相を呈したナポレオンの戦いは、王政によって小康を得たものの、市民の権利と自由の思潮を消し去れず、「諸国民の春」と呼ぶ革命の連鎖によって、今日の国家レジームの基盤を築くことになりました。しかし、こうして成立した国民国家群は、それぞれの「主権・国益・国軍」が競合し、衝突する「戦争の世紀」と「その覇権のための『地政学』の成熟」を促していきます。

第 11 章　ナポレオン戦争の総括『戦争論』

講座⑳2024.5.8（水）「『戦争論』K・V・クラウゼヴィッツ―戦争の必然的『正当性』―」			
戦争の理論＝戦争の正当性	白人世界の戦争	18-19 世紀	伝統的戦争

　プロシアの軍人としてナポレオン戦争に参戦したクラウゼヴィッツは、ナポレオンに敗戦し、捕虜になります。このナポレオン戦争を通して、また、対ナポレオン（対仏大同盟）戦争での体験、シャルンホルスト、グナイゼナウ両将軍からの参謀本部創設指導は、クラウゼヴィッツの思想的骨幹を形成しました。ナポレオン流の戦争、ナポレオンに勝利する体験をノートした戦争法は、死後、『戦争論』にまとめられます。そこでは、「戦争は政治の継続である」と、国民国家が行う戦争の正当性を謳い、ウエストファリア体制から萌芽した近代国民国家の戦争の時代を導きました。
　『戦争論』は、戦争の本質と軍事力の役割を「戦闘」から導き、戦争の世紀の序章、地政学のバックグランドとなります。

第 12 章　主権国家成熟への停滞

講座㉑2024.5.22（水）「戦いの理論『地政学（覇権論）』・『戦争の世紀』の始まりへの予兆」			
ウィーン体制至諸国民の春	ヨーロッパの世界化（近代戦争へ）	1815-1848	国民国家の萌芽

　ナポレオン戦争後、「近代国民国家誕生の寄り道」とも言えるヨーロッパでの王政復古による秩序の回復がありました。ウィーン体制です。ここでは、キリスト教やイスラム教の「聖戦」や、「王権神授」による王位継承と距離を置く世界が現出します。
　市民階級に押され新たに台頭した代表者は、権力の座に就くと、「国民」の期待や「英雄」視に押され「国」の主権、国益を拡大し、覇権の獲得へとはしります。その先駆けであったナポレオン戦争から学んだクラウゼヴィッツは、「戦争は政治の継続」とし、「神が与える戦争の正義の象徴」である『バイブル（聖書）』に代わる『戦争論』を著しました。「戦争のバイブル」は、ダーウィンの『種の起源』―弱肉強食／適者生存―と合わせ、「地政学」を加えて「覇権争奪」の戦略を強化し、世界を「戦争の世紀」へと向かわせます。
　「ウィーン体制」から「諸国民の春」への時代に、私たちは、ヨーロッパの世界に「戦争の世紀」の予兆を見ることができるのでしょうか。改めて学習したいと思います。

第 13 章　日本の中世

講座㉒2024.5.29（水）「中世日本のジオポリティーク――『所与の国家日本』と世界――」			
鎖国体制	日本列島と世界	894（遣唐使廃止）―1867（明治維新）	巧妙な外交政策

　日本は、大陸諸国家と異なり「征服」によって成立した国家ではなく、列島内における「採集民族国家」を経て、集団形成が必至の「稲作民族国家」への移行期に「国家としての統一」が果たされました。この「国家生成」は、ジオポリティークが『地政学』と称され「覇権理論」に特化され、深化を示し、覇者が他を制した大陸諸国家生成と異なっていました。日本の場合、「覇権のための他地域・民族・部族の殲滅・排除・支配」即ち「外部との戦争」を経た建国ではありませんでした。これが「所与の国家」と言う所以です。
　「島嶼国家」である日本は、島嶼外からの文物、文化などのソフト及びハードの導入には慎重であり、それでも、いったん受容すると日本の DNA に同化させていく性癖がありました。またジオ

ポリティーク上の環境が、生存の糧を「稲作」と「採集」が調和された「環境決定的」でありましたから、人口の 90%近くが「非戦闘員」の立場で天象気象を味方にする「日和見」の DNA を育てることになっていきました。
　そこで、ここでは、日本が、ジオポリティークという文脈で、分不相応な戦争を起こし、国際秩序に適わない国際社会への進出などの軌跡を整理して「日本人」に係る理解を深めてみます。

第 5 節　戦争の世紀への誘導

第 14 章　「地政学萌芽」

講座㉓2024.6.5（水）「地球規模の生物生存の体系化―適者生存―」			
適者生存（C・ダーウイン）	自然界	19-20 世紀	適者生存
地政学萌芽（F・ラッツェル）	白人世界の覇権論		生存圏「レーベンスラウム」

　ダーウィンの「弱肉強食・自然淘汰」あるいはラッツェルの「環境決定論」は、人間社会に適用され、「適者生存」、「生存圏」、「自給自足」という時代精神となります。それは、人類の営みにおいて強者が弱者を制する「戦争」の発生が当然の現象であるとすることと重ねられます。ここに「地政学」が始まるきっかけがありました。覇権をめぐる戦争に拍車をかけ、戦争を地球規模に拡大し、時代精神そのものが「戦争」という文脈でくくられる長い時代の始まりです。
　1648 年、ウエストファリア体制によって主権を認められた国家の原点が生じました。しかし、市民革命後、国民、或いは、市民と呼ばれる国家構成の主体はまだ誕生していません。戦争は、相変わらず封建領主がアクターの「主権の及ぶ領域の拡張」・「略奪による富の獲得」・「支配し使役の対象となる敗者である奴隷の獲得」が主たる目的でした。
　そして、「仏市民革命」・「ナポレオン戦争」・「ウィーン体制（王政復古）」、「諸国民の春（市民革命の連鎖）」、「ハプスブルグ家オーストリア皇太子夫妻暗殺」と、事件が連鎖した半世紀の間に、「政府」・「国民」・「国軍」を骨格とする「近代国民国家」が体裁を整え、その国家間に、「主権」と「国益」の競合して戦争を発生させました。そして、主導権と覇権を争って「戦争の世紀」が始まります。クラウゼヴィッツの『戦争論』からヒトラーの『我が闘争』など、「覇権理論」・「戦略論」は、戦争を励起し、「争いの時代精神」を形成する触媒となっていきます。
　その「戦争の世紀」を煽ったのが「地政学」であり、「『強国』の『弱小国』を支配・排除する正当性」を与えたのが「戦争は政治の継続」と謳ったクラウゼヴィッツ、「生物界の淘汰」を当然としたダーウィンであり、戦略源典となるのが、「生存圏」を謳ったラッツェルの『人類地理学』・『政治地理学』であります。ここでは理論の土台となったダーウィンとラッツエルについて学びます。

講座㉔2024.6.12（水）「『地政学 “Geopolitik”』誕生」			
『領土・民族・国家』R・チェーレン	地球規模	19-20 世紀	自給自足論「アウタルキー」

　スウェーデン・ウプサラ大学のチェーレンは、「国家有機体論」に基づき「生存圏」における「自給自足（アウタルキー）」論を謳います。チェーレンが描いた「民族の生存」のための「民族主義 “National Socialism”」は後の「ナチズム」へと継承されました。
　国家の客観的観察によって、「『地政学』は国家を地理的有機体とした国家論」であると概念形成するチェーレンは、ラッツエル同様、「地政学」の裏付けとなる、リッターやフンボルトの提唱から継承されてきた「地理学」学習の重要性を示唆しています。

第 15 章　「地政学」の深化

講座㉕2024.6.26（水）「米国の西進戦略―第 1 期フロンティア『北米大陸の征服』・第 2 期フロンティア『太平洋の制海』―」			
『海上権力史論』（A・T・マハン）	米国の太平洋制海	20 世紀前半	日米戦争前哨

マハンが描いた『海上権力史論』（1890）の主張は、米国が英国から海洋制海権の禅譲を受け今日に到るまでのパワー・ポリティックス行使の始まりを象徴する戦略思想でした。海洋覇権を握ろうとする「ジオポリティーク」として、T・ルーズベルトはマハンを利用します。それは、「孤立主義」を標榜しながら「パクス・アメリカーナ」を実現しようとする、今日米国が標榜するパワー・ポリティックスの先駆けでもありました。

第 16 章　「H・マッキンダーの地政学―ハートランドとクレッセントの対立―」

講座㉖2024.7.3（水）「地政学の創始『民主主義の理想と現実』」―H・マッキンダー

戦争の世紀に導く覇権論（陸軍国 vs 海軍国）	大陸と海洋	20 世紀	海洋覇権の禅譲

政治家であり地理学者であったハルフォード・マッキンダー卿（以下マッキンダーという）は、英国に対する、大陸国家（ハートランド）の企図を予見し、その脅威を、「東欧を制する者はハートランドを支配する。ハートランドを制する者は世界島（ワールド・アイランド）を支配する」と指摘しました。英国は、マッキンダーの示唆、「世界島を制する者は全世界を支配する」という、「ロシアやプロシアのユーラシア大陸外縁への台頭」の警告に無関心でした。

その結果、英国植民地における戦争などの疲弊が英国の地球規模で主導する国力衰退、海洋支配力を斜陽に向かわせ、米国海洋戦略家マハンの目論見のとおり、海洋覇権がアメリカに禅譲され、併せて第 1 次、第 2 次世界大戦でのドイツ（プロシア）の台頭と大戦の企て、ソ連邦の対西欧という現象を招きました。

第 17 章　「伝統的地政学の昇華―戦争の世紀『大団円』―」

講座㉗2024.7.10（水）「ヒトラーの悪魔的天才』、カール・ハウスホーファー

総力戦の世紀―覇権論	地球規模	20 世紀	戦争の世紀

ハウスホーファーは、1900 年、在日独大使館武官付き補佐官として滞在、アジア・太平洋を地政学的要衝として認識、世界を五つに分けた「パン・リージョン理論」を構築、その頂点にヒトラーが君臨するイメージを作り上げました。

ハウスホーファーは、日本における地政学的論考により学位を取得、ミュンヘン大学において地政学の教授に就任します。後にヒトラーの片腕となる R・ヘスは、ミュンヘン大学において修士課程就学時、ハウスホーファーをヒトラーに引き合わせます。

ヒトラーの『我が闘争』は、ミュンヘン一揆失敗後のランツベルグ刑務所収監中にヘスらが聞き取り、書き起こしされたものです。この時期、ヒトラーは武装革命ではなく、「選挙に打って出て、政権を掌握する」ハイブリッド戦術への転換を決心しました。

ヒトラーをたきつけた（ヒトラー自身はハウスホーファーの影響を否定）ハウスホーファーは、D・ノートン（ヒトラーの外交政策顧問）から「ヒトラーの悪魔的天才」と呼ばれます（大東文化大教授 C・シュパング）。

日本の大東亜戦争は、ハウスホーファーの「パン・アジア（汎アジア）論」に影響されていると考えられます。「日本の地政学」の生い立ちもハウスホーファーからの影響です。ここでは、ヒトラーとの関係においてヨーロッパの世界大戦を観察します。

講座㉘2024.7.24（水）「ヒトラーのシナリオ『我が闘争』」

総力戦の世紀―覇権論	地球規模	20 世紀	戦争の世紀

ベルリン政府のドイツが疲弊する「堕落した政策」を批判し、第 1 次大戦の後遺症からの回復を

試みたヒットラーの「ミュンヘン一揆」は失敗に終わり、ミュンヘン郊外ランツベルグ監獄に収監されましたが、待遇は恵まれていたと言われます。獄中、再起を期して「わが闘争」に第 2 次世界大戦を企てる地政戦略を著しました。ミュンヘン大学教授でヘスが師事していたハウスホーファーとヒットラーの邂逅は、明らかにドイツの第 2 次世界大戦へ向かう伏線となったはずです。ハウスホーファーのパン・リージョン論から第 2 次世界大戦を予見し、マッキンダーが指摘した「覇権」と「地政学」的危機の現実を学びます。

しかし、何故、「気狂い」とまで言われたヒトラー国民や軍の全てを率いて意のままに振舞う力が備わったのでしょう。力の一つである「ヒトラーの演説」は、あらゆる手段の中から「ヒトラーにとって最善」の行動を可能にする「催眠効果」を発揮しました。放送・拡声の技術、話術は、オペラの歌唱技量に優れた歌手の指導があったと言われます。しかし自身の予期が狂い始めると精神、肉体の限界点に至って、気狂いに至ったのでしょう。それまでは、実にジオポリティークでありました。結果的に、「東方政策」が失敗に終わったプランでしたが、『我が闘争』は、「地政学＝覇権獲得」を明確にした「地政学諸理論の一つの昇華」でした。

第 6 節　戦争の本質と軍事力の役割と戦後秩序構築―進化する RMA―

第 18 章　戦後秩序

講座㉙2024.7.31（水）「戦争と戦後秩序―カリアスの和約（BC449）からマルタ会談（1989）まで」			
戦争の総括	ペルシア戦争-シリア戦争（地球規模）	BC499-2021	戦争目的と戦後処理
戦争の歴史を（頻度・継戦期間・広域性・死傷など）定量的に観察し、ジオポリティークを探ります。ここでは単なる殺傷、破壊だけではなく、「戦争の抑止・局限」に供する示唆を見出します。			

第 19 章　クラウゼヴィッツの『戦争論』批判―制限（限定／局限）戦争／間接戦略―

講座㉚2024.8.7（水）「海軍戦略からのインプリケーション―制限戦争―」			
J・コーベット	戦域の特定	20 世紀	戦争の規模縮小
海洋戦略家であったコーベット（英）は、クラゼヴィッツの「絶対戦争（殲滅戦）」があまりにも悲劇的かつ残虐な死傷・破壊をもたらした第 1 次世界大戦を顧みて「海上で雌雄を決する」戦闘に着目します。艦隊決戦は、戦域・戦力、そして双方の継戦能力から戦闘時間が限定されます。こうして、戦争目的を達成するために制限された戦争を考え出されました。米国の戦争にこの思想が導入されていくのですが、米国の戦争に「制限戦争」が効を奏した先例を探すことは困難です。 コーベットの最も説得力のある主張は、「陸上の交通路は国家に帰属しているから、それをコントロール下に置くには武力で奪取するしかない。他方、海洋、海上交通路（シーレーン）は公共の財産であり海洋全てを海軍で覇権下に置くなど及ばない。従って、海軍戦略、海洋戦略は自国艦船の航行安全を維持できる影響力をシーレーンと海洋の要衝（チョーク・ポイント）に如何に及ぼすかという局限（制限）した範囲で考えなければならない。だから七つの海を支配するなどは幻想にすぎない」であり、チャーチルの激賞する処でもありました。			

講座㉛2024.8.28（水）「日本の国のかたち―国際社会における立ち位置―」			
柳澤協二 IGIJ 理事長	国際社会における役割	21-22 世紀	戦争と距離を置く国の構造
第 2 次世界大戦直後から講和条約締結、社会復興に成功した吉田茂の「国家像」は 70 有余年日本を「戦争」を遠ざけ犠牲者を発ｗ生させることがありませんでした。この成功を顧みるとともに、			

次世代のために目指すべき国家構築の目標を提示します。2014 年以降の政治において、「覚悟無き戦争への接近」が行われてきが、日本の防衛安全保障の在り方を問うた時、その理想の姿が見えてくるのでしょうか。合わせて国家安全保障の在り方を議論します。

講座㉜2024.9.4（水）リデル＝ハートの「クラウゼヴィッツ批判」			
リデル＝ハートは『間接戦略』で絶対戦争を回避	欧州全域	20 世紀	戦争の世紀
第 1 次世界大戦に従軍したリデル・ハートは、過酷で悲惨な塹壕戦に衝撃を受け、犠牲を局限できる戦争法を提案しています。冷戦期、ベトナム戦争時には「人道戦争 “Humanitarian Warfare”」が言われましたが、リデル＝ハートは、第 1 次大戦後、英国から「戦争逃避」と批判されながらも、既に「犠牲局限」のための戦い方を提起していました。しかし、悲惨な犠牲と忍耐が必然の第 1 次・第 2 次世界大戦時代、この考え方は受け入れられませんでした。リデル・ハートの「間接戦略論」は、「新たな地政学」を予期させるグローバリゼーションやボーダレスの世界観が普通の時代にこそ適用できると考えます。			

第 20 章　米国の対外戦略―N・スパイクマンの示唆―

講座㉝2024.9.11（水）1730-2030「米国は、国際世界のバランスメーカー／警察官」			
米国の西進戦略―リムランド構想―	太平洋・ユーラシア東縁	21 世紀	権威の喪失
スパイクマンは、米国の西進戦略とマッキンダーの主張を融合させ、米国が太平洋覇権を維持する政略を組みたてました。太平洋のチョークポイントを、有力な陸海空軍、海兵隊の部隊展開によって支配し、同盟および友好国を、米国の意のままに操り、米国の覇権に加担させ、ユーラシア大陸へのにらみを利かすかの策謀を示唆しています。 そのジオポリティークについては、「①同盟及び友好国、脅威対象国、そして自国の位置関係②シー・パワーの発達が海洋を狭くする現象③海・空は地球上の全地域に展開可能④ユーラシア大陸こそ世界覇権の要衝（世界島）⑤ハートランドから海洋への進出は不変・継続的⑥ユーラシア・クレッセントは内側・外側に区分して考慮⑦ユーラシア大陸の外洋進出は内側クレッセント（海洋公道構築）で抑止⑧ハートランド内の移動手段の発達はリムランドの脅威⑨リムランドの連帯が世界情勢安定の鍵」となると主張しています。			

第 7 節　日本の戦争

第 21 章　日本における「伝統的地政学」―東京学派と京都学派―

講座㉞2024.9.25（水）1730-2030「日本の地政学―未成熟な戦略的失敗―」			
総力戦の世紀―大東亜共栄圏―	アジア・太平洋	20 世紀	アジア主義
日本の「地政学」は、ハウスホーファー在日時（1908-1910）に紹介されました。多くの論考が和訳されています。それらは、アジア主義や、枢軸同盟、対米戦争に影響を与えた地理学と政治・外交・軍事の関係を論じたものですが、日本国内の学際的研究は、「戦後の『大東亜戦争』PTSD」の時代精神の下、「戦争に加担した戦犯」の烙印を押されることを避けて、学者が外部に漏れないように始末した結果ではないかと推測します。 「大東亜戦争」の名称が閣議決定された如く、日本の地政学の実体は、アジア・太平洋戦争時における日本の戦争の正当化、国威発揚に利用されたものでした。それは、ドイツの地政学と比べれば未成熟なものでした。ここでは、戦争決定と、「大東亜戦争」の名称が、ハウスホーファーが説			

いた「パン・リージョン（パン・アジア論／汎亜細亜主義、あるいは大アジア主義など）」に由来する経緯について振り返ってみます。

第 22 章　日本の近代戦争

講座㉟2024.10.2（水）1730-2030「具現可能な戦略欠落の大東亜戦争―身の丈を超える戦い―」			
大東亜戦争の希望的観測―計略の欠落（終戦目標）	アジア・太平洋	20 世紀	アジア主義

日本の戦争は、戦域の拡大が中国大陸・太平洋 1 万平方キロに及んだ（ドイツのヨーロッパ戦線は 5 千平方キロ）にもかかわらず、占領地の統治、戦場管理、継戦のための補給その他、必勝の体制を大陸および、太平洋に点在する島嶼に徹底する計画がありませんでした。

脆弱な準備をもって米国と決戦する危険性は、石原莞爾が指摘していました。東条英機は石原の主張を退け、石原を予備役に移籍しています。戦争は、「英国がギヴアップすれば米国もあきらめる」と、希望的観測に満ちていました。「英国要素を果たすため」、インド攻略の指揮官に牟田口廉也を当て、ビルマ戦線で失敗に陥った作戦は、愚将を指揮官に充てたことが原因でした。

結果、日本が作戦を断念、敗戦への道を走ることになりました。太平洋の島嶼作戦は、補給が断たれ、戦死よりも餓死、食糧不足で体力が衰えた結果の病死が勝りました。

ここでは、ハウスホーファーの「パン・アジア」を鵜呑みし、植民地支配から独立を目指す関係国の主役になり得ないアクターを頼りに「大東亜共栄圏構想」を考えるという「戦争計画」に進んだ「日本のリーダーシップ」について考え、日本の安全保障上の選択肢である「専守防衛」に係る示唆を得ます。アジア主義や、枢軸同盟、対米戦争に影響を与えた地理学と政治・外交・軍事の関係、すなわち「地政学」について、何処まで的を射た学習ができていたかにも関心を寄せなければならないでしょう。

第 8 節　大戦後の秩序

第 23 章　WWII 後の世界秩序―冷戦と戦争抑止―

講座㊱2024.10.9（水）1730-2030「WWII 後の秩序―勝者の世界（パワーポリティックス）・冷戦―」			
新たな戦争の幕開け―東西世界の対峙―	地球規模	1946-1989	冷戦・戦争抑止

抑止は、相互が置かれた距離に関係なく、国力を背景とするパワー・ポリテイックス（威嚇・圧力）の行使によって、他者を圧倒して他者の行動を制御、抑制する現象を言い「権力行使の一変種」であるとも言われます。この現象は、地球を二分した東西対峙の冷戦期、核兵器保有の競争に顕著でした。

1950 年代には、ミサイル／爆撃機／潜水艦などのプラットフォームと呼ばれる運搬技術の開発競争を含め、米ソの間で「核抑止戦略」が謳われ、「使用しない大量破壊・殺りく兵器」が量産、保有されていくという「ジレンマ」に陥っていました。他方で無制限の核兵器競争の歯止めとなる「危機管理の制度化」が必要になったわけですが、抑止のメカニズムでは、核大国間に有効であって、非対称的な関係（非核保有国間）において抑止が機能するか確証はありませんでした。

第 9 節　ポスト冷戦

第 24 章　伝統的戦争の終焉と冷戦後の世界―『新たな地政学』―新たな連邦／連帯国家―

講座㊲2024.10.23（水）1730-2030「国家群の誕生―距離感の短縮―」

秩序の再編（新たな国際システム／連邦）	ボーダレス	21 世紀	ポスト冷戦

冷戦終焉・東西世界崩壊がもたらした最大のジオポリティークは、EU の成立でした。日本の防衛に「四周環海は自然の防壁」という時代が在りましたが、その時代、大陸に存在する国家は四周を敵の脅威に包囲されていました。

ところが、EU は、従来の四周に国境を接する敵性国家が全て友好国になるという「至高の集団防衛・安全保障体制」の構築に成功したのです。安全保障はもとより、政治・外交・経済などにも新たなジオポリティークが起きています。

第 25 章　新たな戦争

講座㊳2024.10.30（水）1730-2030「大国の植民地放棄―分散・分割・隔離・殲滅の PTSD―」			
地域再編と非国家主体／連帯	国家破綻地域	21 世紀	ポスト冷戦

冷戦終焉は、東側世界に混乱をもたらしました。冷戦時、東側のイデオロギー体制維持強化のため、多数国、多民族の領域において、反体制勢力抑圧のため、宗教・居住地が体制側政府の力で強制的に分断分散され、ロシアの植民が促され、ソ連のパワー・ポリティックス・シンパの独裁が進みました。

その結果、冷戦終焉、東西対立崩壊、東側国家群の体制消滅にもかかわらず、原状復帰が困難となり、かえって主導権争いや、新旧住民の対立が激化して収拾困難に陥っています。それは植民地宗主国が被植民地を混乱に陥らせた現象と似ています。

第 26 章　ジオポリティーク総括

講座㊴2024.11.6（水）1730-2030「再び『地政学』ではなく何故『ジオポリティーク』なのか」

戦争の世紀において「地政学」は、「主権・領域・国益」において他を圧倒するため、争いに優位を誇り、最終的に勝（覇）者たるべき戦略を象徴する理論でした。

それらは、「主権国家」、「国民国家」と呼ぶ近代国家の誕生―19 世紀初め、ナポレオンが覇者となったフランスに象徴されますが―以来、カール・フォン・クラウゼヴィッツの『戦争論』、チャールス・ダーウィンの「適者生存・弱肉強食」論、フリードリッヒ・ラッツエルの「生存圏」の主張、ルドルフ・チェーレンの「自給自足・国家有機体」論、アルフレッド・セイヤー・マハンの『海上権力

史論』、ハルフォード・マッキンダーの「ハートランド（大陸国家）の脅威 vs クレッセント（海洋国家）」、ジュリアン・コーベットの「制限戦争論」、カール・ハウスホーファーの「パン・リージョン（地域覇権）」論、リデル=ハートの「間接戦略論」、アドルフ・ヒトラーの『我が闘争』、ニコラス・スパイクマンの「ハートランド vs リムランド」など、優れた戦略理論を生み出した学者たちが、「地政学」という文脈で「覇権」を論じ、これらを総じて「地政学」と称してきました。

日本では、未成熟でしたが、カール・ハウスホーファーの「パン・アジア」を焼き直した「大東亜共栄圏」が謳われ、アジアの覇者たらんと軍事力を行使したのが大東亜戦争です。

ナポレオン戦争に始まる近代国民国家間の戦争は、「伝統的戦争」と呼び、第 1 次、及び、第 2 次世界大戦でその最高潮に達しました。

第 2 次世界大戦直後に始まった冷戦は、「社会主義・全体主義・共産主義」と「自由主義・民主主義・資本主義」を標榜する東西世界の対峙でした。しかし、第 2 次世界大戦の終局に米国が使用した、一度の使用で大量殺戮と破壊を可能とする「原子爆弾（核兵器）の保有」は、米・ソ（露）・英・仏・中・印・パ・北朝鮮・イスラエルに至り、その総保有量は、人類の破滅を招く超

十分量に達しています。この恐れは、「核兵器が戦争を抑止する」という皮肉な、「一色触発」の危惧を常続させ、大国（スーパー・パワー）を極とする軍事的対峙の「冷戦時代」を現出しました。

付言すれば、この冷戦時代は、「地政学」＝「覇権論」の昇華が、「新たな『地理学＋政治学』の現象 ”Direct Approach” から ”In-Direct Approach”」を導く時代でした。

即ち、「東西世界の構造崩壊＝冷戦の終焉」と同時に、西側世界では、「昨日の敵が今日の友」となる「国家群の集合体運営の実験」が始まりました。従前には警戒を要し、牽制の対象であった国が、往来自由の「親戚国家」となる構造が誕生しました。それが “EU” です。四周友好国家の連鎖が成立しました。安全保障上、これほど強力な連帯はありません。

他方、社会主義・共産主義体制の抑圧下にあった東側世界では、民族や宗教の隔離や離間、政治・思想活動の自由の束縛など、「抑圧を目的とした社会的制約からの解放」から「民族主義 “Nationalism” 回帰の過激な萌芽」が「実力行使を伴う主導権争い」を伴う混乱を発生させることになりました。それは、第 2 次世界大戦後の「被植民地国家」が「被支配」からの「独立」を目指し一丸になって戦った「民族主義」とは異なり「内紛」の様相が顕著になっています。

冷戦後の旧東側世界に起こった民族主義は、全体主義、あるいは同様の体制下で「強制された社会主義・共産主義の押し付けという旧体制」に対する強烈な反発の顕現です。それは、自由と民主思想の成立を目指した旧体制からの改革であった「諸国民の春」を彷彿とさせ、イスラム教義に縛られた世界での行動は「アラブの春」と呼ばれました。「ポスト・冷戦」の旧東側世界において「民族の再結集」でもある民族意識が高揚した国家の再建は、「覇権」=「地政学」ではなく、「エクメーネを取り戻す」ジオポリティークの世界であって、困難の克服に多大なエネルギーと犠牲と時間を要する様相を呈しています。

また他方で、冷戦後の米国は、世界に対して、米国一極の影響力行使を自認していたわけですが、「勢力均衡」や「紛争国家の平和と安定」を調停するために、米国が「米国流の制限戦争」をもって介入を図った行動は、かえって「民主主義の宣教」を映し出し、「民族主義」の反発を招いています。

ちなみに、米国が抜け出せない第 2 次世界大戦後の「日本統治」の成功事例の踏襲は、「所与の国家において培われた島国の穏やかな国民性」があったからこその賜物であることを学習していません。それは、生存のため、四周の脅威との戦いを強いられることが常態であった、大陸に存在する国を相手にする場合と異なります。米国は、介入先における失敗によって、米国自身の「世界の警察官＝勢力均衡差配者」の立場を弱め、あるいは、国際社会の信頼を損ねることになり、「トゥキュディデスの罠」に中国を招じ入れる結果をもたらしました。

この現象は、「英国の海洋覇権が米国に禅譲された現象」とは異なります。

中国の「軍事・経済」におけるパワー・ポリティックスの台頭は、「対米」という文脈で新たな「覇権の競合」を生むことになりました。それが、「米中対立」の混沌です。この混沌は、政治・経済においてお互いを相容れない、レジームの全く異なった陣営の対立であった米ソを極とする東西対立＝冷戦と異質な「地政学の新たな概念」の創出を示唆しています。従って、「新たな冷戦」と呼ぶことにはジオポリティーク上、悩ましい誤解が生じます。この現象を「可視化」するために、ここでは、これまでの学習の総括を行い、「地政学」ではなく「ジオポリティーク」としての社会現象を認知していきたいと考えます。

第 27 章　地政学の深化

講座㊵2024.11.13（水）1730-2030「地政学転換の系譜」			
古典的地政学の転換―2 次元から 5 次元へ―	異次元世界	21 世紀	仮想・電脳・拡張

RMA は地球上の戦争と社会構造に様々な変革をもたらしてきました。それらは、地表という平面から、水面に至り、長い時間をかけ、鳥の世界である空間を犯して地表から離れた世界を作り出しました。それが 3 次元のジオポリティークです。移動の距離・時間が、まさに飛躍的に延伸・短縮されると、「時間要素」抜きにジオポイティークを語れなくなりました。それが 4 次元のジオポ

リティークです。
　ところが、科学技術の発展は、人類を地球の地表だけではなく、地中、水中、空中そして地球外の宇宙空間にジオポリティークを広げ、さらにコンピューター技術が「時間・距離」の概念を「瞬時」、と「距離感ゼロ」の仮想社会を作るようになりました。これが所謂「電子空間」あるいは「サイバー空間」と言われる世界の出現であり、5 次元ジオポリティークの登場です。
　ここでは、このジオポリティークの深化に伴う「人間社会の秩序」が「秩序」の概念に則（のっと）った価値観の共有を提供するための示唆を考えてみます。

第 10 節　進行中のジオポリティーク

第 28 章　ハイパー世界の現実

講座㊶2024.11.27（水）「古典的ハイパー世界の存在―2 大宗教の摩擦―」			
キリスト教／イスラム教	全地球規模	0-2021 年／610-2021 年	一神教世界

　2 大宗教は、ボーダレスかつグローバル、1 神教のルーツが同一ですが、信仰上の対立を 1500 年余も続けています。顕著な特徴は、キリスト教が国家に採り入れられて来たのに対し、イスラム教が、教義を国の法と同一視する国家を建国していることです。この二つの宗教は、国境、国のレジームを超えて「宗教的な従属関係」を形成しています。この現象が一つの「超国家（ハイパー・ステート）現象」です。もう一つの特徴は、原点において、白人とアラブの民族それぞれを対象に、それぞれ異質な価値観を共有しながら地球上に広く伝播しました。そこでは、当然のように、それぞれが存在する環境において個性を形成しながら、国家間戦争同様の「キリスト教 vs イスラム教」の作用反作用現象を拡大していきます。それぞれの衝突は、宿命的でもありますが、今日的にも相互の排他思想は、国際社会の悩ましく相容れない衝突を絶やしていません。

講座㊷2024.12.4（水）「伝統的秩序から新秩序形成の RMA―新たな思考の必然への示唆―」			
ハイパー国家の出現	5 次元世界	21 世紀	ISIL

地理学と政治・外交・軍事・経済・文化などを関係づけて来たジオポリティークは、いまや古典的・伝統的次元と異なる世界の考慮が必然となりました。中でも、宇宙空間は、地球と接する 3 次元、あるいは、速度と時間要素を加え 4 次元に世界を拡張しました。加えて、電磁（サイバー）空間は「5 次元世界」を視野に入れています。さすれば、ISIL が世界中に「メールアドレスという住民登録」によって国民を得ていることも頷けます。

第 29 章　大国のジオポリティーク

講座㊸2024.12.11（水）「大国のジオポリティーク」			
地球規模の覇権戦略	中・露・米・EU	21 世紀	戦略の摩擦と新たなバランス

　「戦争の世紀」における覇権獲得の理論「地政学」は、東西対峙の冷戦世界を現出し終焉しました。しかし東側世界の崩壊と再興の間隙をぬって、ウクライナ、クリミアは、ロシアのハード・パワーとソフト・パワーが融合した「ハイブリッド作戦」が功を奏し、国際社会が反発を示しているものの、現実には「併合」されました。これは、ソ連邦・スターリン時代からの作為的なロシア植民政策の成果でした。それは、あたかも、「ヒトラーの東方政策」に似て非なる戦略の成功です。「コサックダンス」は、今や「ロシア人の踊り」と化しています。

ロシアが謳う「ユーラシア主義」は、ドイツへのカリーニングラード（ケーニヒスブルグ=東プロイセン）、日本への北方四島返還をも視野に入れ、日・独を巻き込んだ、政治・経済・軍事にバランスの取れた、米国、中国、EU に比肩する「国家群大国=ユーラシア連合」の建設です。

同様の、人種同化戦略は中国の "Chinese Dream"の一環、「一帯一路戦略」にも包含されています。「ディアスポラ」は、ユダヤ人が国を失った結果、たどり着いた他国において、やむなく「小さな生存コミュニティー」を形成した現象でしたが、今日、中国は、作為的に「中国型ディアスポラ」形成を督励し、各地に中国 DNA を拡散させている様子が見受けられます。それは、冷戦時代を経て、中国が「経済・軍事強国」となり、また「陸・海両棲大国」として「一帯一路」戦略を実働する戦術であると考えられます。陸路は「シルクロード」を、海路は英国が各地に経営していた「真珠の首飾り」と名付けた「寄港地の数珠繋ぎ」の再現と北極海を睨んだ「氷の道」への進出が顕著です。

アメリカ合衆国の西進は、ユーラシア・クレッセントにおける制限戦争失敗の立て直しに加え、中国との摩擦解消を模索中です。米国の戦略的動向は、対中国と言う文脈では守勢に陥りつつあります。太平洋の制海（コントロール）の秩序は米・中いずれの主導となるのでしょうか。それとも秩序の共有が図れるのでしょうか。

EU は、英国の離脱で「国家群のデザインが変わる」のではないか注目されます。

ここでは、今日、これらジオポリティーク現象の主アクターである、米・中・露・EU の目指す「世界」のイメージを整理します。

2025 年

第 30 章　日本の国のかたち

講座㊹2025.1.8（水）「日本の新たなジオポリティーク」―柳澤協二 IGIJ 理事長講義―			
中庸国家の建設（ミドルパワー国家）	地球規模	21 世紀	日本の国際秩序維持の役割

日本は、「白村江の戦」後の「奈良時代」、「戦国時代」が段落した「江戸時代」において、国内、国際社会という文脈において、「安定的に平和である・国民生活が保障されている・対外政策において風波が立たない」極めて見事な国家経営を行っていました。そこでは、内外ともに、争って覇を唱えるなど無く、国際社会の動静にほどほどの関与を図りながら、「国家安全保障は専守防衛の堅持」があって、競争と無縁な「中庸国家の経営」、「分際を心得た立ち位置の維持」が顕著でした。

江戸期の鎖国政策下では、大航海時代の荒波にもまれることなく、米国相手でさえ、十数回の交易を重ねています。外国の医学も導入されました。他方で、日本地図が作成され、北方領土の経営に対露警戒が行われ、国外に向けて専守防衛を固め「無事な日本」を維持していました。

残念ながら、「明治維新後の国家経営」は、「第 2 次世界大戦の敗北＝大東亜共栄圏構想瓦解」という大出血を伴う大失敗を招きました。日本は、この敗戦の教訓を活かして、今後どのような「国づくり」を目指していけば宜しいのでしょうか。

伝統的戦争の脅威にさらされ、富国強兵を目指す伝統的国家経営時代と異なり、5 次元ジオポリティークの世界に居て、日本は「日本の国のかたち」をどのようにイメージして行けばいいのか、ここでは、「中庸国家」、「国際社会のもめごと―秩序と価値観の衝突=戦争―」を調停する役割を担える「日本のデザイン」を試みます。当然のことですが、生まれてくる様々な理念に、新たな概念形

成は不可欠です。ジオポリティークが深化を遂げた歴史に学び、「新たな秩序の世界」形成への寄与を試みます。

（2023.9.28 現在・担当：事務局　林）